

## 讚美歌21 229

- 1 いま来たりませ、救いの主イエス、  
この世の罪を あがなうために。
- 2 きよき御国を 離れて降り、  
人の姿で 御子は現われん。
- 3 みむねによりて おとめにやどり、  
神の独り子 人となりたもう。
- 4 この世に生まれ、陰府にもくだり、  
御父にいたる 道を拓く主。
- 5 まぶねまばゆく 照り輝きて、  
暗きこの世に 光あふれぬ。
- 6 御父と御子と 聖霊の主に、  
み栄え 今も とこしえまでも。

Evangelisches Gesangbuch (EG) Nr. 4

T:Martin Luther nach dem Hymnus >Veni redemptor gentium< des Ambrosius von Mailand um 386

M: Einsiedeln 12. Jh. Martin Luther

1 Nun komm, der Heiden Heiland, der Jungfrauen Kind erkannt, dass sich wunder alle Welt, Gott solch Geburt ihm bestellt.

2 Er ging aus der Kammer sein, dem königlichen Saal so rein, Gott von Art und Mensch, ein Held; sein' Weg er zu laufen eilt.

3 Sein Lauf kam vom Vater her und kehrt wieder zum Vater, fuhr hinunter zu der Höll und wieder zu Gottes Stuhl.

4 Dein Krippen glänzt hell und klar, die Nacht gibt ein neu Licht dar. Dunkel muss nicht kommen drein, der Glaub bleib immer im Schein.

5 Lob sei Gott dem Vater g'tan; Lob sei Gott seim ein'gen Sohn, Lob sei Gott dem Heiligen Geist immer und in Ewigkeit.

ヨハネの黙示録 第3章20節 「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、私の声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところには行って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（新改訳版）

聖書は、旧約聖書でも新約聖書でも、繰り返し私たちに、「恐れるな」と語りかけています。それは、私たちが、不安を抱えた存在だということを見抜いているからだと思います。逆説的ですが、何かを待つことができる人は、自分が不安を抱えるから、待っているのです。満足している人や、安定している人は、待つ必要がないからです。

来週日曜日(11月29日)から、アドベント(待降節)を迎えます。コロナ危機の年でなければ、「待つ」ということについて、こんなに切迫したことを語る必要もなかったでしょう。待望することというには、毎日性急なだけの生き方をやめることでもあります。希望を持って厳しい環境を耐え、これを乗り越えた世界に憧れることかもしれません。私たちが凝り固まった考えから開放され、目標を失ったまま生きる日常から、抜け出すための期間なのです。

今年の後半以降、コロナ危機の日本では、多くの不安と困難を抱え、自分の死の時期すらも、待てない人たちが明らかに増えています。そこで、「待つ」ということの意味は、ますます真剣に問われなければならないし、人々が「待つ」ことができるように、私たちはもっと心を用い、自分にできることを行動に移していかなければなりません。

警察庁による自殺統計(速報)では、自殺者は7月から増加に転じていましたが、10月に急増し、月間2000人を超えました。絶対数の6割が男性ですが、女性自殺者の増加は、前年同期比で1.8倍に達しました。

近年における社会調査のデータ分析結果では、人は、所得が減ったり、失業したりしただけで、死を選ぶことはありません。加えて、病気や体調不順、孤独、家族内の対立など、4つ以上の要因が重なると自殺に至る確率が高まるとされます。家賃や払えずガスが止められ、次第に追い詰められる事態も増加しています。市町村に「生活困窮者支援」の窓口があり、住宅確保給付金や無利子の生活支援融資を受けられることすら知らない人たちがいるのも現実です。

総務省の「労働力調査」結果の第3四半期(7月から9月)で、非正規就労者が、前年同期比で120万人以上も減り、その過半数を女性が占めていることに思い当たります。厚生労働省は、コロナ危機による雇止め・解雇は6万人強といいますが、ハローワークの把握した数は、あまりに少ないと感じます。官庁統計で、警察庁の自殺や事件に関する統計には、ほかの統計にない、驚くべき速報性があります。警察は、人が亡くなると、犯罪かどうかを認定するため、現場に出動し、詳細な業務の結果が報告され、集計されているからです。

11月の最後の週を迎え、山々のみならず、都市のいたるところで紅葉が世界を美しく飾っています。しかし、紅葉は、「冬枯れ」を思い起こさせ、隠れたところで生き物が死を迎えることを予告しているのです。同時に、全ての生命が失われるのではありません。困難又は過酷な時期を超え、生き伸びる可能性が与えられていることも、思いだしましょう。

私たちは、コロナ危機の世界で、孤独な時間が増え、人との接点や会話もないなかで、生きる必要に迫られます。それが続くと、ほかの人からの愛を感じたり、新たな友情が生じることを期待できない社会ができあがっていくことを、私は恐れています。

コロナ危機による消費の収縮を回復させるために行われる「ゴートウー・トラベル」が、感染者数の増加によって見直される見通しです。実際は、疫学と経済学が共同作業するのに必要なデータは公開されず、正確な分析も判断も、できていません。PCR検査体制が急速に整備された地域で、無症状の感染者が増加することや、回復し退院する人たちが増加している状況も考慮すべきです。そのうえで、重篤者の発生数を抑え、十分な治療の体制を維持することが重要です。表面的な感染者数の変化に、一喜一憂すべきではありません。

人間にとって、移動することや、人と出会うことは、とても重要な意味を持っています。「人の移動の経済学」(economics of migration)は、人が移動することの意味を、所得の最大化など経済的な理由のみで単純化してはなりません。コロナ危機のなかで、人が移動することを制限され、生きる意欲や人生の可能性を奪うという現実を把握し、対処しなければなりません。

聖書に戻りましょう。古代教会の人たちは、「神様(イエス様)来てください」と祈っていました。ここで、神様が来られるというのは、「世界の終わり」を意味するものではありません。私たちに死の危険が迫っているところでも、神様に来てくださいと願っているのです。

それに対する聖書の答えは、「見よ、私は、戸口に立ってたたいている」なのです。毎年のクリスマス行事が定例化しているのに、神様が来られることを重大だと感じられなくなっているのが私たちです。世界の運命は、私たちの予想をはるかに超えたところにあるのですから。

聖書は、マタイによる福音書(第25章)で、キリスト・イエスが人間の姿で、私たちのなかに生きて働いている現実を語っています。私たちが、神様において兄弟である、その人々を見捨てることがあってはならないという真剣な問いかけです。その兄弟との出会いを、希望として受け止める勇気を得たとき、私たちは「待つ」ことを学んだと言えるかもしれません。神様にきてくださいと祈ることをせず、自分がどう生きていいかもわからないのが、私たちの姿です。

「待つ」ということは、神様は必ず良い方向に導いてくださるという楽観主義ではありません。現在しかないこの瞬間、神様とともに働きたいという希望に生きることです。真剣に未来を考え、過去からも学びましょう。ニカイアの信条に書かれているように、自分の有限な命を超え、永遠に働く神様に導びかれる希望を感じることができるでしょう。

アドベントを前に、世界にも日本にも不安なものが満ちています。しかし、神様の下で私たちの兄弟である人々を見捨てず、人と人の横のつながりをとりもどして、「待つ」勇気を与えてください。私たちが、クリスマスに真に祝える者となれますように。「神様、きてください！」